《修士論文要旨》

南北朝・室町期における陰陽家及び陰陽師の動向

細田慈人*

本稿は、南北朝・室町期における陰陽家の動向に関して考察した。室町時代において卜占の最高位であった「軒廊御卜」は本来の規定から外れた儀礼順となる。嘉吉二年（一四四二）の時点では暦応二年の記事と同様に主水司が水を置いていた。しかしながら本来火を置くはずの主殿寮の役割は掃部寮が代わりに果たした、との事例があったのだろう。「水を置くのは主水司である」という正規の流れは嘉吉二年から文安元年（一四四四）の間に「必ずしも置くわけではない」というものに変わり、「火を置くのは主殿寮」という規範も「主殿寮役」という単なる配役へと変化したのである。また、本来は神祇官の補佐的存在として参陣していた陰陽師は平安・鎌倉期と違い、卜占が行われなかった際には神祇官ではなく、陰陽寮に卜形提出を命じられるという形でその占文に意味を、価値を持つようになる。御卜に及ばない際には、陰陽寮の占文が最も効力を発揮するのであった。また、「軒廊御卜」の行われる契機となる怪異の発生に変化が現れる。平安・室町期と現れなかった、あるいは圧倒的に少なかった人為による怪異上奏が増加する。それは神人による殺傷であったり、喧嘩による神輿の破損などであった。本来ならば超自然的、あるいは怪奇的な理由だけで行われるはずであった「軒廊御卜」は室町時代において人為的な理由においても多数、行われるようになり、そこには人の意思が介在したといえる。上奏をするのは人間であるが故に意図的に怪異の発生を起こし易く、国家的卜占として最高位であったが故に権威付け、あるいは国家の危機として社殿の改築などに利用されたとも言える。しかしながら、利用されたとしても当時においては未だに国家的卜占としては権威高かったのである。「軒廊御卜」に参陣した陰陽師の構成はそれまでの陰陽頭が陰陽寮を率いて参陣する形から安倍氏・賀茂氏それぞれの本宗家（嫡流）の当主格や次期当主が陰陽頭と共に参陣するという形へ変化する。陰陽寮の寡占状態にある中で賀茂・安倍二家間で競争が激化、更にそれぞれの家においても本宗流と分家筋で競争が激化、それぞれの陰陽師としての評価を高め、為政者や権力者である貴族や将軍への奉仕を勝ち取るために家の筆頭となる陰陽家本宗

平成23年度　*文学研究科文化財史料学専攻

の当主格という存在を作り、その当主格の元で家の陰陽師を構成する形が必然となった。そうして賀茂氏嫡流の陰陽師・安倍氏嫡流の陰陽師・そして陰陽寮の長官たる陰陽頭という三者による陰陽師構成が生まれ、この勘解由小路（賀茂氏）嫡流・土御門（安倍氏）嫡流・陰陽頭という「軒廊御卜」における参陣構成は陰陽道が、あるいは陰陽師が関わる行事・祭祀、祓においても、同様に構成されるようになる。陰陽師の参陣構成はそれらを招集する者の意識が顕在化したものといえる。また、「御卜」以外の陰陽師の占いが関わる場面でもこの構成が意識されるようになる。そして、武家においても陰陽師の参陣に対する意識はあり、それが柳原氏のいう勘申体制であったのだろう。将軍家としては義満期のように陰陽道を国家掌握の手段として取り扱うような形ではなく、幕府の内部で確固たる体制として存続させるために、陰陽頭という入れ替わりの多い職官としての陰陽師長官よりは、陰陽家の当主という一度代替わりを果たせば頻繁に入れ替わる可能性の少ない存在を重視したのである。

「軒廊御卜」における参陣構成と幕府の構成する陰陽師の参陣構成の違いはそのまま朝廷と武家の陰陽師を扱う意識の違いになっている。朝廷はあくまで行事の際の招集での構成であり、個別の祓・祭ではそれぞれ個別に陰陽師を利用していた。しかし、武家では、陰陽師を祈祷祭祀の観測所として安賀両家を認識しており、そうすることで権威の一助を担わせたのである。室町時代を通して、陰陽家は朝廷においても幕府下においても一定の参陣の法則性を持っていた。それは賀茂氏嫡流・安倍氏嫡流・陰陽頭とであり、武家においてもこの意識は当初あったが、後に陰陽頭という代替わりのサイクルの早い存在よりは、陰陽家の当主という長いスパンを持つ陰陽師で構成するという意識に変わり、それは陰陽師を祈祷・祭祀の観測所・管制塔として部署的な立ち位置に組み込む事によってもたらされた。

室町時代に隆盛した陰陽道は以後、近世になり、幕府のもと、土御門家によって再構成されるまでは一時的に没落する。賀茂氏本家であった勘解由小路家は在富の代を最後に嫡流として成立しなくなる。今回、最後に在富の代に関して少量ながら考察してみた。賀茂氏嫡流最後の陰陽師、在富は天皇の「御祈管領」、後に従二位となり、更には幕府下においても精力的に活動していたであった。